

## 江戸を吟味する

### 1. 幕府体制のあらまし

#### (1) 統治

- ・ 期間は家康が征夷大将軍に任命（1603.3）されて幕府を樹立してから明治に改元（1868.10）されるまでの 265 年間を指す。
  - ・ 大名は武家諸法度によって厳しく統制され、違反した場合は改易処分等厳しく罰せられた。
- 家光の時代に改定された寛永令（1636）では参勤交代が制度として明文化された。
- ・ 京都・大坂・長崎等全国の要所は直轄領（天領）として幕府役人が直接統治した。
- ・ 朝廷は禁中並公家諸法度や京都所司代によって統制された。
- ・ 対外的には長崎出島での中国（明・清）・オランダとの交易、対馬藩経由の李氏朝鮮との交易以外は外国との交流を禁止するいわゆる鎖国政策を採った。  
（実際には薩摩藩支配の琉球による中国との交易や松前藩による北方交易が存在した。）
- ・ 幕政は関ヶ原以前からの徳川に仕えていた譜代大名・旗本によって運営され、外様大名・一門の親藩大名は関与しなかった。

\* 幕府の中央集権的で強力な統制と鎖国体制が長い平和な時代を齎したと考えられる。

#### (2) 経済・社会

- ・ 経済成長  
鎖国のため国内自給体制であったが、各地で新田開発等が積極的に行われ経済は成長した。  
農村にも貨幣経済が浸透し、四木（桑・漆・檜・楮）三草（紅花・藍・麻又は木綿）等商品作物の栽培が進み、また優れた上方漁法の広がりや入浜式塩田による塩の量産体制の整備等で各地に流通網が広がった。  
手工業では綿織物が発達し、酒造業、窯業も発展し各地に問屋制家内工業が勃興した。  
人と物の流れが活発になる中で、城下町・港町・宿場町・門前町・鉱山町等様々な性格の都市が各地に生まれた。18 世紀、人口 100 万人の江戸は世界最大の都市で東海道は世界一人通りの激しい道であった。  
元禄までの間、長崎貿易は輸入過多で金銀の流出が多かったが長崎新令以後は輸入品であった綿布、生糸、砂糖、鹿皮、絹織物などの国産化を奨励した。
- ・ 災害  
一方で江戸は大災害に見舞われた時代でもあった。

有名なものだけでも、17世紀後半の明暦の大火、18世紀初期の宝永の大地震・大噴火（富士山）、享保の大飢饉、後期の天明の大飢饉、19世紀半ばの天保の大飢饉等があり、宝永以後人口はほとんど増加せず、享保、天明の大飢饉頃は減少局面も見られた。

（宝永噴火後幕府は「諸国高益金令」を出し、はじめて全国的課税を行った。）

#### ・身分社会

幕府は、身分制度特に“武士身分”を明確化し幕府の支配体制を強化・確立することに努めた。

“武士身分”は城下町の武家屋敷に住んで”軍役“を役目とし、”百姓身分“は村に住んで農業・漁業・林業等を職として”年貢（米・特産物等）や夫役（労働）“を収め、”町人身分“は、町人町に住んで”冥加金・運上金等”を収め、“百姓や町人とは異なる身分”には皮革業、刑吏役、芸能、医者等様々な仕事をする人々がいた。

（幕藩体制下ではまだ国税に相当するものはなかった。）

#### ・参勤交代

寛永12年（1635）三代将軍家光は、諸大名の江戸参勤を制度化し、江戸と国元を隔年に往復するよう義務付け、大名の江戸屋敷では人質として正室や嫡子が暮らすようになったが、これは諸大名が将軍へ服従していることを示すパフォーマンスでもあった。

以降、諸大名は街道の整備費用に始まり、道中の宿泊費や移動費、国元の居城と江戸藩邸両方の維持費等大きな負担となったが、一方で江戸の発展に寄与するとともに大名が通行・宿泊・休息する宿場が繁盛するという経済効果があった。

（100万石と称される加賀藩の場合、大名行列は2,000人から3,000人、多い時で4,000人に達したという）

参勤交代の費用は、江戸藩邸の費用を含めると藩収入の50%を超える藩が大半であり、大名の随員が大勢地方と江戸を往来したため、彼らを媒介して江戸の文化が全国にひろがるとともに地方の言語・文化風俗などが江戸に流入し相互に影響。変質・伝搬。しあう面があった。

（参勤交代することで江戸に単身赴任する各藩の家臣がかなりの数に上った結果、江戸人口の約半数は武士で女性の人口比率は極めて少なかった）

\*経済成長、交通・流通網の整備・身分制下での安定した時代であったが、大きな災害にも見舞われた。

## 2. フォーカス（社会と文化）

### （1）循環型社会

・鎖国体制下の江戸時代では経済や文化が日本独自の発展を遂げた。

現在われわれはエネルギーや食糧のほとんどを海外からの輸入に頼っているが当時は

これらのすべてを国内の資源やエネルギーで賄っていた。

このため、いわゆる生活資材は少なくほとんどすべてのものが貴重で丁寧に長く使われ、そのための専門のリユース・リサイクル業者が活躍していた。例を挙げると

- ・修理業者

鋳掛け（金属製品の修理専門業者） 瀬戸物の焼き継、 籠や（木製容器の籠を締めなおす） 錠前直し 鏡研ぎ 提灯の張替え 朱肉の詰め替え 下駄の歯入れ 臼の目立て . . .

- 回収業者

紙屑拾い、紙屑買い 古着屋 古傘買い 古樽買い ロウソクの流れ買い 灰買い

- ・下肥汲み

農家では下肥えを肥料として使うため契約した地域や家に定期的に汲み取りに行き、お金を払うか農作物と交換する形で買い取った。

流通経路が整うにつれ、馬や船等を使う下肥問屋や小売商も出現した。

. . . . .

- ・江戸時代の生活資材は、そのほとんどすべてが植物性で、使用后廃棄して燃やしても最終的に二酸化炭素と水になって来年生えてくる植物の原料となり一年たつと大体元に戻る仕組みになっていた。

植物の光合成は太陽光によって再生産されるので無くなることはない。

一番わかりやすい例が稲作で、当時の人口の約 50%が水田稲作に従事し、当時のヨーロッパの小麦生産に対し土地面積当たり 10 倍程度の扶養能力を持っていたという。

また重量で米の 80%も取れる藁は、屋根、みの、藁草履、米俵、釜敷き、家畜の飼料、燃料等に使い、米は最終的には肥料として使うことで略 100%循環していたのである。

江戸時代は、限られた資源を最大限に活用して経済を維持し、文化を発展させた社会の一つのモデルである。

(因みに人口も幕末までほぼ 3,000 万人程度で安定していた)

\*循環社会の中ですべてのものが大切な資源として十二分に活用された。

## (2) 江戸の文化

- ・前期の元禄文化

主に上方（京都・大坂）で花開き、担い手は豪商や武士が中心で文化は華麗でかつ人間味を重視しているのが特徴といえる。たとえば

大和絵：土佐光信、住吉如慶 . . . といった優秀な絵師が誕生した。尾形光琳は独自の画風を確立した。

浮世絵：菱川師宣が遊女を描いたのがきっかけである。

浮世草子：井原西鶴の好色物が有名であるが他に町人物や武家物もある。

人形浄瑠璃や歌舞伎：当時の世相を反映した世話物、時代劇のような時代物があるが脚本家として近松門左衛門、演者として竹本義太夫が有名である。

俳諧：西山宗因が談林派を始めたが、弟子の松尾芭蕉が芸術にまで高め蕉風俳諧を作り上げた。

がある。

#### ・後期の化政文化

派手な要素が少なく庶民参加型の大衆文化が盛んで、貨幣経済の浸透に合わせ農村にも広がりを見せた。例としては

歌舞伎：庶民でも鑑賞できる価格帯になった。脚本家の鶴屋南北が手掛けた“東海道四谷怪談”が有名になり、市川団十郎、尾上菊五郎等の名優も生まれた。

読み物：庶民生活の滑稽さを描いた滑稽本、恋愛事情を描いた人情本、歴史文学である読本、子供向けの合巻等が流行した。

十返者一九の“東海道中膝栗毛”や滝沢馬琴の“南総里見八犬伝”等が有名である。

浮世絵：多色刷りの木版画技術が開発されお陰で爆発的に広まった。

安藤広重の“東海道五十三次”、葛飾北斎の“富嶽三十六景”、喜多川歌麿の“美人画”が有名である。

俳句：与謝蕪村、小林一茶等が活躍した。

がある。

\*前期は上方文化、後期は江戸の庶民文化が花開いたな。

### 3. 吟味

#### (1) 長期平和と身分制度について

- ・武家政権が統治の正当性を獲得するうえで非常に重要なものは“武威”であった。

幕府は“武威”を守るために、極力戦いを回避する政策を採らざるを得なかったため国内的には幕府を頂点とする身分制度を、対外的には鎖国政策を採ることになったと考えられる。

したがって身分制の最も厳しかったのは、支配階級の“武士”であり、“家格”が厳然とした世襲の身分を表していた。

とは言え、八代将軍吉宗が始めた“足高の制”等人材登用の道も開かれており在職中のみの優遇措置ではあったが抜擢人事も行われていた。

寛政4年(1792)に第一回目が行われた“学問吟味”は家格制の制約の下ではあったが、能力を問う試験として非常に大きな意味があった。

- ・老中・若年寄・奉行等幕府の中核・中間管理職を務めたのは宿老(井伊、榊原、酒井、酒井)を除く譜代大名や旗本たちであり、幕末に井伊が勤めた大老は非常置職である。

- ・大名の序列は、石高や家の由緒等で一応のものはあったが最終的に一元化したのは朝廷からもらう官位であったが、実質これを決めたのは幕府である。

(官職名は実体を伴うものではなくあくまで名前のようなものであったが・・・)

- \*身分制は、家と結びついた身分と役回り（職業）の固定化であり、安定化した社会を作り出すのに有効であった。

## (2) 参勤交代制について

- ・幕府倒壊後、明治政府は江戸を東京と改め日本の首都とするが、藩主から知藩事となっていた旧大名もその多くが東京に居住し、廃藩置県は問題なく行われた。本来分権的な政治体制である大名制度を時間をかけて中央集権的な制度に変えていたのは参勤交代制であるといえよう。

- ・江戸城を取り巻くようにして配置されていた諸大名の上・中・下の三か所の宏大な江戸屋敷跡があったおかげで、その土地を利用し政府機関を建てることが出来たのである。幕府から拝領していた合計 900 近い江戸藩邸があったおかげで霞が関の官庁街も日比谷公園も大手町の大企業ビル群も整備可能となったわけである。

(因みに 10 万坪に及ぶ本郷の東京大学敷地も、加賀藩前田家の上屋敷跡である)

- \*維新後の都市計画の中で武家屋敷跡地が有効活用された。

## (3) その頃の世界（欧米）の趨勢

- ・荘園制（領主制）の崩壊と絶対王政の成立

14, 15 世紀はうち続く戦乱と疫病によって農村人口が激減し、封建社会の経済的基礎が弱体化したため貴族や諸侯の力が衰え都市の大商人等に支持された国王の下に政治的権力が集中するようになった。

16~18 世紀、世界貿易の急激な発展は、新大陸からの貴金属の流入とともにヨーロッパの商業活動の繁栄を招きブルジョア層の勃興を齎した。

また国際貿易の主要商品・毛織物はヨーロッパ各地で生産が急増し新しい生産技術の革新が行われ産業革命を進める端緒となった。

この頃の過渡的な国家形態は絶対王政と言われるが、重商主義政策の下で中央集権的な官僚行政機構が整備され近代国家の形式を準備した。

- ・近代国家の成立

18 世紀末のヨーロッパでは、アメリカ独立宣言（個人の自由と権利の平等、主権在民・・・民主主義）の思想を取り上げた“人権宣言”を行ったフランス革命と、新しい技術の採用による機械的大工業と工場制度による資本主義的生産様式を確立させたイギリスの“産業革命”を主軸として市民を中心とする近代国家が誕生していった。

\*19 世紀中葉には全ヨーロッパおよび北アメリカにおいて社会の近代化がほぼ完成した。

#### 4. これから（課題）

##### (1) 現代生活との対比

- ・自由放任、私的財産所有、自由競争、大量生産・大量消費等を基軸として世界に広がっていった資本主義は、現在その内包する問題が大きく表面化して我々の未来を脅かしている。

富を増大し物質的に豊かな社会を築き上げてきた資本主義は“利潤追求”と“成長”を骨子としてきたため、現代に至ってその“負の側面”が目立つようになってきた。

- ・現代社会は、豊かな物質とサービスを得るため膨大な量の化石燃料・エネルギーを使用しているがこれらは元に戻ることはないエネルギーである。
- ・一方、江戸のエネルギーはほとんどが木材で、廃棄して燃やしても最終的には二酸化炭素と水になって、太陽エネルギーの光合成をおこなう植物の原料となり翌年植物に生え変わる。

江戸時代人の動力のほとんどは人力と太陽エネルギーであり、彼らは一年を周期とする植物国家＝バイオマス国家を築き上げていたのである。

- ・生活レベル面から考えると現代がはるかに豊かで便利であることは疑いようがなく、我々が直ちに貧しい生活にもどるなど出来ない相談であろう。
- ・しかし、地球の温暖化を招きながら、大量の廃棄物を出しながら成長し続けるのも不可能である。
- ・江戸時代の循環型社会を参考にしながら我々にできる循環型社会の構築を考え出すことが急務ではないだろうか。
- ・ここで江戸の人々が身に着けていた心構え“足るを知る”は、今でも問題解決の重要なキーワードになるのではないだろうか。

（この言葉は、徳川光圀の寄進になる、京都・竜安寺の方丈の北側にあるつくばいに“吾唯足知”と刻まれており、釈迦の教え、“足るを知るものは貧しいといえども富めり”に由来しているという）

- ・現在日本はエネルギーの約 80%、食料（カロリーベース）の 60%、木材の 80%を輸入に頼っているが鎖国下の江戸時代はすべて国内のエネルギー・資源で賄っていたのである。一方廃棄物に目を転じると、自給率 40%の食料の 20%以上が廃棄されており、一人当たりの廃棄量としては世界一でまたゴミ焼却炉数 1,800 も群を抜いて世界一といわれている。

\* “いま世界が抱える温暖化とゴミ問題で日本が大きな比重を占めている”ことと“江戸時代が鎖国体制下で自給自足の {足るを知る} 社会で暮らしていた”ことを真剣に見比べてみる必要があるのではないだろうか。

## (2) 平和の維持

- ・江戸時代の平和は、武威を基盤とした幕府の政策（武家諸法度、身分制度、参勤交代、鎖国・・・）によって齎された。
- ・グローバル化が進んだ現代で鎖国政策を採ることは困難であり、まして大国中心に多くの国々が核兵器を保有している中で“武威”によって中心となる勢力が世界を統治するなどとても考えられるものではない。
- ・智と話し合いによる統治はできないものであろうか。
- ・印刷術が発明された中世以降、絶え間なく続く欧州各地の戦乱の中で、“The pen is mightier than the sword=文は武よりも強し”という諺が生まれている。
- ・文を知恵、情報、教育・・・等広義に解釈すると「フリン効果」が期待される。
- ・フリンはニュージーランド、オタゴ大学の政治学者で世界各国の知能テストの結果を分析し、テストの得点は世代が進むにつれて上昇しているという現象をまとめた。  
（例えばベルギーは1958年平均IQ93が1967年は100に上昇）  
フリンはこのIQ上昇の理由は進化などではなく社会経済的な環境が良くなったためではないかということを検討している。
- ・またスティーブン・ピンカー（認知科学者、進化心理学者、ハーバード大学心理学教授）は、大著“暴力の人類史”の中で暴力減少の経緯を数多くの実証とともに論説し個々人の権利の尊重：教育の普及：自我の確立が暴力抑制に効果を発揮することなどを述べている。

\*開発途上国を含め、まだまだ貧困・紛争等の問題が数多く存在する世界ではあるが、地道に息長く社会経済的環境整備に尽力し知性の向上に努力を傾けていけば、未来はより良い世界として開けていくと信じたい。

完

2019.9. 2